

訳者あとがき

本書は Rashid Khalidi, *Hundred Years' War on Palestine: A History of Settler Colonialism and Resistance, 1917-2017* (New York: Picador [Paperback edition], 2021) の全訳である。著者ラシード・ハリディーは近代アラブ史の専門家で、エドワード・サイードの没後にコロンビア大学に設置されたエドワード・サイード特別記念教授職に就いている。研究業績としては特にパレスチナの現代政治史やイギリスおよびアメリカの中東政策などについて多数の著作と論文を刊行してきた。彼の研究業績は学界で高く評価されており、北米中東学会のアルバート・ホーラーニー賞など数々の権威ある賞に選ばれてきた。まさにパレスチナ研究の御所と言うに相応しい人物である。また一九九〇年代に北米中東学会の会長を務めた経歴もあり、英語圏では中東地域研究の業界全体で広くその名が知られている。日本でも多くの中東研究者が彼の業績に触れてきたが、日本語に翻訳されるのは今作が初めてである。

ラシード・ハリディーはアメリカ生まれのパレスチナ人だが、父イスマーイールの家系は、中世から今に至るまで数々の学者や政治家などを輩出してきたエルサレムの名門ハリディー家である。ハリディー家の一族がこの聖都に深く根付いてきたことは、エルサレムの旧市街に残された「ハリディー家の斜道」という地名からも一目瞭然である。一説にはイスラームの預言者ムハンマドの時代にシリア地方の征服に尽

力した名将ハリッド・イブン・ワリッドを先祖に持つとも言われる。

ラシード・ハリディイの研究業績を語る上では、家柄も含めた彼の個人的な背景を無視することはできない。本書の冒頭にも登場するように、彼はハリディイ家が一九〇〇年の設立から代々受け継いできた私設図書館で近現代史の貴重な一次史料に触れることができた。また、父イスマールを含め、「歴史の証人」とも言うべきハリディイ家の親族から過去の逸話を聞く機会にも恵まれた。ラシード本人も一九七〇年代からパレスチナ現代史の重要な諸局面に当事者として立ち会った経験を持っている。本書はこれまでの著作以上に、彼だからこそ綴ることのできたパレスチナ史であると言える。

ハリディイの著作でもっとも有名なのは『パレスチナ人アイデンティティ——近代民族意識の形成』（一九九七年¹）だろう。二〇世紀初めに登場したアラビア語メディアの報道分析を通して、パレスチナ人固有のアイデンティティを否定したり、シオニズムへの反動としてしか捉えない欧米社会の言説に挑戦したのが同書である。ハリディイは、二〇世紀初めに生まれ、第一次世界大戦後の英仏による中東分割を背景に強化されたパレスチナ人アイデンティティが、アラブ民族主義や（多宗教的枠組みを前提とした）宗教的帰属、農村・都市単位での忠誠心などが折り重なる重層的アイデンティティであることを強調する。これは、近年のパレスチナ人の民族解放闘争で自決権を主張する際の重要な学術的根拠ともなってきた。本書が六つの戦布告の章立てから成るのも、英米が支えるシオニズムの入植者植民地主義が民族的実体であるパレスチナ人に仕掛けられた「戦争」である点を強調するためである。

他にもハリディイには、パレスチナ問題の形成に大きく関与した英米の中東政策や、その影響下でのパレスチナ指導部の闘争についての著作が多い。代表的なものに『イギリスの対シリア・パレスチナ政策 一九〇六—一九一四』（一九八〇年²）、『封鎖下にて——一九八二年戦争中のPLOの意思決定』（一九八六年³）、

『復興する帝国——中東における西側諸国の足跡とアメリカの危険な進路』（二〇〇四年⁴）、『鉄の檻——国家建設のためのパレスチナ人の闘争』（二〇〇六年⁵）、『不誠実な仲介者——アメリカはいかに中東和平を壊したのか』（二〇一三年⁶）がある。マドリッド中東和平会議（一九九一年）にパレスチナ人代表の政治顧問として参加するなど政策決定に関与したり、オスロ合意後はPLO指導部批判を精力的に行ってきたハリディイ独自の経験からの分析も多い。エルサレムの名望家出身として長くパレスチナ指導部と関わりつつも、エドワード・サイード亡き後アメリカの政策を批判する在米離散パレスチナ知識人の第一人者となったハリディイの立ち位置を示していると言える。

一次史料を使った政治史というハリディイのスタイルは、一九七〇年代以降に公開された国家史料を使ってイスラエルの建国神話の虚偽を暴いてきた「新しい歴史家^{ニューヒストリアン}」との共通点を見いだせるかもしれない。新しい歴史家の代表格であるベニー・モリス、イラン・パペ、アヴィ・シュライムは、イスラエル人歴史家の立場から自国の公文書を使ってイスラエル建国過程の実証研究を行い、パレスチナ人への暴力を否認してきた従来のイスラエルの公式言説を覆して話題を呼んだ。これに対し、ハリディイの研究の大きな特徴は、国家機構もアーカイヴもなく史料ですら収奪されてきたパレスチナ人指導部からの視点を含む政治史を記述していることである。意思決定に関わった証言者であり、名望家出身かつ一時的であれ政治顧問としてパレスチナ政治に関わったからこそアクセスできた史料があることを考えれば、新しい歴史家が描けなかったパレスチナ指導部の内情を伝える重要な研究である。

パレスチナ人の政治闘争という文脈から見ると、国際法の原理原則や公正・公平の観点からパレスチナ指導部の政策を批判しつつも現実主義に基づく政治解決を志向するハリディイの姿が浮かび上がる。かつて著書『鉄の檻』や『不誠実な仲介者』では、七〇年代の闘争の過程で二国家解決案を採用したPLOの選択

を重視し、国連安保理決議二四二号を土台とした二国家解決を主張していた。その上でオスロ合意をアメリカとイスラエルが協調して作り上げた合意と捉え、入植地建設を含むパレスチナ人の土地接収を加速させる一方、わずかな自治区を權威主義的なパレスチナ自治政府に統治させる仕組みであり、パレスチナ人民の自決権に基づく二国家解決への裏切りとして批判してきた（オスロ合意を「二国家解決」と語る欧米の政治言説の問題を、ジョージ・オーウェルの小説「一九八四」さながらの「言語の腐敗」と呼んで痛烈に批判した）。それゆえ和平の枠組みをあるべき二国家解決策に作り直すよう指導部に求めるのが従来のハリデーの姿勢だった。しかし、その後パレスチナ情勢が悪化の一途を辿るなかで生まれた本書では、ハリデーの立場に変化が見られる。自治政府率いるファタハ指導者が利権死守のためオスロ合意の枠組みに拘泥するなか、二〇〇七年以降はファタハと対抗勢力ハマースとの内紛が起き、ファタハが西岸を、ハマースがガザを支配する分裂体制が生まれ、和解の見通しも立っていない。さらにトランプ政権が誕生すると、エルサレム併合の実質的承認や難民問題の切り捨てなど和平交渉の最後の支柱も粉砕されたほか、自治政府ではなく湾岸アラブ君主国のサウジアラビア、アラブ首長国連邦、バハレーンを事実上の交渉相手にする動きが進んだ。こうした変化のため、本書でハリデーは歴史的パレスチナの二二%に東エルサレムを首都とするパレスチナ国家の建設だけでなく、パレスチナ全体の植民地化を覆すことも含めた民族闘争の戦略を見直すよう提起している。そのための人権者植民地主義と抵抗の一〇〇年史の再考が本書の作業であった。日本語版の読者も、アメリカ主導で押し付けられた「解決」についてのハリデーの批判を受け止め、既存の和平交渉の枠組みだけに「解決」を求める日本のパレスチナ政策を再検討する必要があるだろう。

訳者あとがきを執筆中だった一〇月七日、ハマースのイスラエル領内での軍事作戦とその後のイスラエルのガザ大規模侵攻が起こった。パレスチナ戦争の百年史を訳し終えた直後、新たにガザでジェノサイドが差にも、本書の役割は大きい。

本書の翻訳は、訳者の一人である山本健介が二〇二〇年の後半に、「ひとりごと」としてSNS上で本書の重要性を指摘したことから始まった。偶然その投稿を目にした鈴木啓之が山本の主旨に賛同し、翻訳出版の方途を探ることになった。山本が訳書出版の手順について実績のある研究者に問合せ、鈴木が出版社への打診を始めた。いずれも難航することが予想されたが、法政大学出版局編集者の奥田のぞみさんに協力を仰ぐことが叶い、さらに金城美幸が訳者として加わった。二〇二一年三月に掲げた「高い目標」では一年で訳文を完成させ、出版まで漕ぎ着ける計画であったが、コロナ禍による行動制限が当初の予測を超えて続いたこと、訳者の就職、それぞれの職場や家庭での事情が重なり、翻訳に二年を費やすことになった。訳者三名にとつては、コロナ禍のなか本書が常に傍らにあったことになる。

訳出に際しては、山本が序章、第6章、終章、謝辞、金城が第1章、第2章、鈴木が第3章、第4章、第5章をそれぞれ担当した。ただし、最終稿の決定では、すべての原稿に三名が目を通し、訳語や語調の統一を図っている。この過程では、人物や組織の名称など、誤りが明らかである箇所は修正と、Web掲載文献のURLの更新や修正を可能な限りで行った。訳者三名のあいだで意見や解釈が一致しなかった箇所については、著者にメールで問合せ、回答を得た。著者からの快活な回答は、訳者三名を大いに励ました。

著者のハリデーは、英語圏の読者を念頭に置いて本書を書いている。そのため、ことに欧米で知名度を得ている中東圏の人名や地名に関しては、アラビア語の定冠詞（アル）が本書では省略される傾向があった。これは著者自身が「ラシード・アル＝ハリデー」ではなく、「ラシード・ハリデー」と自ら

を表記する点にも表れている。このアラビア語の定冠詞の省略については、原著の表記を優先した。また、本文に引用されている書籍のうちすでに日本語訳のあるものについては、可能な限りで訳文を参照し、必要に応じて訳語を改めた。原註は巻末にまとめて表示しているが、本文のページに*で表示された註は著者にやるものである。訳註は「」で補った。

本書の刊行に際して、訳者の三名はそれぞれに家族や同僚、知人らの励ましに多くを負ってきたが、共通して謝辞を送るべきは法政大学出版局の奥田のぞみさんであろう。「遅々として進まない原稿を我慢強く……」という「あとがき」にありがちな文言の意味を、これほど深く噛み締めたことはない。ともすれば訳語調になりがちな文章を、日本語で読む読者に向けて整えてくださったのは、奥田さんの人並み外れた編集力であった。原稿とゲラのチェックに熱心に付き合ってくださいました一丸暖歌さんと児玉恵美さんにも深く感謝したい。誤字脱字を二人が見つけてくる度に、また一歩、より良い形で刊行に近づけたという実感を得た。また、本書の刊行に際しては東京大学スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座から助成を受けたことも訳者を勇気づけた。多くの人の手を経た本書が、日本社会でながく読まれ、パレスチナ問題の理解に寄与することを願いたい。

二〇一三年一月

訳者一同

- (1) *Palestinian Identity: The Construction of Modern National Consciousness* (New York: Columbia University Press, 1997).
- (2) *British Policy towards Syria and Palestine, 1906-1914* (London: Ithaca Press for St. Antony's College, 1980).
- (3) *Under Siege: PLO Decision-Making during the 1982 War* (New York: Columbia University Press, 1986).
- (4) *Resurrecting Empire: Western Footprints and America's Perilous Path in the Middle East* (Boston: Beacon Press, 2004).
- (5) *The Iron Cage: The Story of the Palestinian Struggle for Statehood* (Boston: Beacon Press, 2006).
- (6) *Brokers of Deceit: How the U.S. Has Undermined Peace in the Middle East* (Boston: Beacon Press, 2013).
- (7) 彼らの研究は和平交渉期の九〇年代には多くの注目を集めたが、論争の過程で各人の立場の違いが明らかになり、その後は一潮流としての勢いを失った。モリスは第二次インティファダ後にパレスチナ人への国家暴力を公然と正当化する立場を示し、「変節」が指摘されるようになった。他方パベは、イスラエル建国後も続くパレスチナの民族浄化について研究を続け、シオニズムを入植者植民地主義という観点から批判し、反シオニスト知識人の急先鋒になったが、イスラエル社会で弾圧を受けイギリスに移住せざるを得なくなった。一九四五年にバグダードで生まれ、イスラエルへの移住後イギリスで研究を進めたイラク系ユダヤ人シュライムは、もとはシオニズムを民族解放運動と捉えてその正当性を認めつつ、一九六七年以降の占領を批判する立場であった。しかし近年、イラクのユダヤ教徒のイスラエルへの移住のきっかけを作ったバグダードでの反ユダヤ暴動が、シオニストの工作によるものだったことを公文書を使って改めて明らかにし、シオニズムをヨーロッパ的人種概念に基づく「ユダヤ人」と「アラブ人」の対立をアラブ世界に埋め込んで多宗教間の歴史的共存を破壊させた人種主義イデオロギーとして批判するようになった。

著者

ラシード・ハーリデー (Rashid Khalidi)

1948年、米国ニューヨーク生まれ。博士。コロンビア大学エドワード・サイド特別記念教授(現代アラブ政治)。ペイルスト・アメリカン大学(AUB)で教鞭を執り、2003年より現職。パレスチナ研究所(IPS)発行 *Journal of Palestine Studies* 編集委員。中東近現代史を幅広く専門とする。1982年にイスラエルによるレバノン侵攻に現地遭遇し、*Under Siege: PLO Decision-Making during the 1982 War* (Columbia University Press, 1986)を著す。1991～93年にマドリッドとワシントンでイスラエルとパレスチナの和平交渉に顧問として参加。*Brokers of Deceit: How the U.S. has Undermined Peace in the Middle East* (Beacon Press, 2013)など、米国によるパレスチナ問題への関与についても著作多数。



サビエンティア 71

パレスチナ戦争

入植者植民地主義と抵抗の百年史

2023年12月15日 初版第1刷発行

2024年3月20日 第2刷発行

著者 ラシード・ハーリデー

訳者 鈴木啓之・山本健介・金城美幸

発行所 一般財団法人 法政大学出版局

〒102-0071 東京都千代田区富士見 2-17-1

電話 03(5214)5540 / 振替 00160-6-95814

組版 村田真澄 / 印刷 平文社 / 製本 積信堂

装幀 奥定泰之

© 2023

ISBN 978-4-588-60371-6

Printed in Japan

索引

11 箇条計画 (PLO) Eleven-Point Plan 184, 187

1948年戦争 (第一次中東戦争) War of 1948 61, 87-93, 96, 105, 111, 114, 123, 129-130, 135-136, 276, 302 → ナクバも見よ

1949年停戦 armistice of 1949 89-90, 105, 129

1956年戦争 (第二次中東戦争) War of 1956 → スエズ戦争

1967年戦争 (六日間戦争・第三次中東戦争) War of 1967 / Six-Day War 97, 111, 117-120, 123, 126-128, 130-133, 135, 137, 140-141, 143, 163, 193, 203-204, 276

1973年戦争 (第四次中東戦争) War of 1973 111, 159, 171, 56n7

1982年戦争 War of 1982 → レバノン侵攻

BDS運動 Boycott, Divestment, Sanctions 300-301, 78n6

CIA 95, 119, 44n3

EU報告書 (2018年) European Union report 249

KGB 174, 69n28

Wafa 168, 173, 53n47, 55n6, 56n8

あ行

アールフ 'Arif, 'Arif al- 28, 41, 28n19

アイゼンハワー Eisenhower, Dwight 112, 123-125, 128

アイユブ朝 Ayyubid rulers 42, 253

アイルランド Ireland 11, 34, 51-52, 54, 64, 76, 153, 278-279, 285, 287, 30n41, 31n44, 32n59, 32n60, 36n19

アイルランド共和軍 (IRA) Irish Republican Army 278-279

アイン・アル=ヒルワ難民キャンプ 'Ain al-Hilwa refugee camp 154, 172

アキレ・ラウロ号襲撃 Achille Lauro (ship) attack 219

アサド (シリア大統領) Asad, Hafez al- 152, 157, 218, 230, 64n58

アシュラーウィー 'Ashrawi, Hanan 208, 222-223, 226, 233-234, 236, 71n55

アズハル大学 al-Azhar University 139

アスワン・ダム Aswan Dam 109, 111

アチソン Acheson, Dean 96

アッシリア人 Assyrians 25

アッバース (アブー・マーゼン) 'Abbas, Mahmud (Abu Mazin) 237, 258-259, 261, 299, 65n63, 67n17

アッバース朝 Abbasid period 42

アデルソン Adelson, Sheldon 273, 24n26

アデン Aden 55, 111

アドモニ Admoni, Nahum 193, 214, 63n54

アトリー Attlee, Clement 86

アドワーン 'Adwan, Kamal 152-153, 259

アブー・アル=アッバース Abu al-

The Hundred Years' War on Palestine

パレスチナ戦争

入植者植民地主義と抵抗の百年史

Rashid Khalidi

ラシード・ハーリデー [著]

鈴木啓之・山本健介・金城美幸 [訳]

